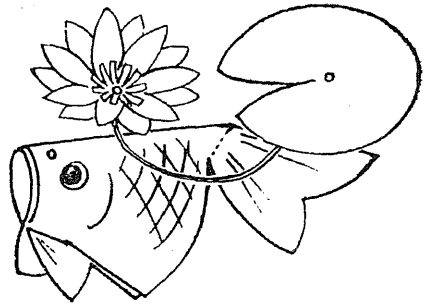


たのしい あしごと



(きんぎよ・すいれん)

及 川 ふ み

六月頃の幼稚園や保育園は、幼児が集団生活にもなれて来て、幼児たちの園内のすべての生活が気分的にもおちつきがあり、幼児自身の内にある力を外へ、気安く出せる様子が見出される様になつてくる。

園庭に備えてある運動具の使用の状態にも砂場の遊びにも、幼児が各自それぞれの工夫によつて、興味の満足を求めて遊ぶ段階に入つて来る。

この段階の遊びは、室内での種々のものにもあらわれていることに心づかなくてはならない。そしてこの段階に入つての適切な指導ということも同時に考えるべきである。

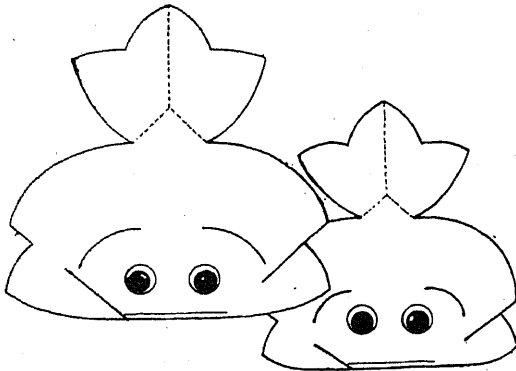
その一例を製作について試してみると、幼児自身で種々の形をかきあらわしその形をきり取つて、これを色紙にはつて一つの作品とするのが容易に出来る、楽しい遊びとしてよるこんで製作にはいることが出来る。これが少しつづくとさらに、そのものをつくる興味を持続するためにも、又興味をいやが上にも増強するためにも、それ以上の一つの段階への指導を考えらるべきである。

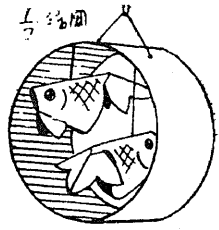
花をきりぬき、蝶をきりぬくことが容易に出来る、それは多くの場合平面のものが多い。この平面的なものだけで幼児たちは決して満足しているのではない。ただ自分自身の

能力だけでは力一ぱいのものであるというにすぎない。それ以上のものを求めている。それに対して満されるところがなければならぬ。この点指導の効くところである。幼児たちが求めてかなわないところは何であるかを指導者は洞察しなければならぬことである。

幼児たちによつてつくられた平面的のものを、それから出発してこれを立体的にし、或

1/3 縮小





これは活動的のものとして、幼児たちのおもちやとして満足させるのには如何なる方法が考えられるだろうか。

1.2 縮圖

1. 幼児のつくつた平面的な金魚を基本としてそれを立体的のものへの誘導として、金魚の背を紙の輪の部分にかくとか、或は裏表二枚の金魚を作るとかによつて簡易な立体感の表現が出来る。

次はこの立体感のある金魚を、さらにおもちやとしてこれから如何に進展するかということである。

遊びの進みの一つはこの金魚を金魚鉢の金魚として遊ぶことであり、又一つは、金魚つりの遊びに使うことにも出来る。如何様な金魚鉢にするかは、それこそ、その幼児の能力の状態、材料の都合などによつて、幼児自身の工夫と、指導者のたすけによつて作られるのである。一組の幼児たちが一様の金魚鉢になつて友達と同じものを作るよこびを満足させることも一方法でもあるし、又、各自が

それぞれ異つた材料によつて、異つた鉢の出来ることも勿論のぞましい。要は一つの型にはまつてしまわないことである。

製作の指導の一つの別のあり方は、大人が幼児の適度を十分に理解して、よき形を簡易な方法によつて作れるものを与えることである。たのしいおしごとはすべてその意味において案じられたものであるが、金魚などもその一つである。大人の意図にはよるがその中にも、部分的には各自をどこかに現わす余裕をのこしておくことを忘れてはならない。

大小二つの金魚はそれぞれ好める色にぬつて、きりはなし胸ひれの部分の切りこみを組み合せるのである。

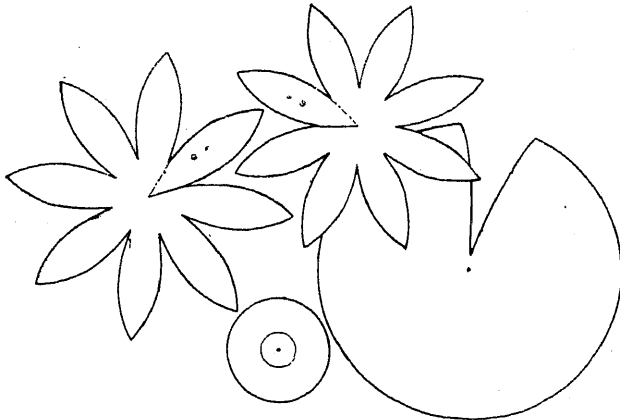
水運

これはクレオンを十分にぬつて、水に浮かせて遊ぶものとして取扱つてみたい。

花びらの「のり」の部分一ひらだけは花びらの重るところであるからそこをのぞいては黄色か、桃色の美しいクレオンを花びらの裏表に十分にぬつておく。

葉も花びら同様に裏表にクレオンを十分にぬつておく。紙の包組のみどり色のものにはやかりクレオンをぬつて、黄色の心、花の小、

つぎに花の太を通して結び目を作つて、組を二〇センチ位の間において葉の裏から表え通してとめておく。水運は作り終れば水鉢の中にのせて、花の浮くのを実験させるとよい。



1.3 縮圖